



探究を日常的に展開し、生徒それぞれの世界を広げ、深め、創造につなげる

追手門学院高校(大阪・私立)

探究の教科化や、すべてのカリキュラムで探究を行う創造コースの開設など、生徒一人ひとりの幸せにつながる学びの場づくりを一步ずつ進める追手門学院高校。その原点にある考え方や実践内容、生徒たちの成長の姿をレポートします。

こんな学校は必読!

- 探究活動で生徒のモチベーションが上がらない
- 各教科に探究の視点を取り入れたい
- 探究を軸にしたカリキュラムマネジメントを模索中

取材・文／藤崎雅子

個別化・協働化・プロジェクト化・リフレクシオンの融合へ

追手門学院高校は近年、探究の教科化や、探究・プロジェクト型の学びをカリキュラムの中核においた創造コースの開設など、新しい取組を次々と立ち上げている。その変革の原点には、現在教頭を務める辻本義広先生が2010年代に感じていた、自らの教育実践に対する違和感があるという。

「当時、進学実績で学校が格付けされる風潮が強く、大量の補習や課題で生徒に勉強させることが良しとされていました。しかし、あるとき生徒が疲弊している様子を見て、本当にこれでいいのか?とモヤモヤし始めたんです。その答えを求めて全国の先生の考え方や実践から学ぶなかで、『学びを変えたい』と強く思うようになりました」

19年の校舎リニューアルに伴い、教育コンセプトも見直した。その軸となったのは、学びに対するプレッシャーからの脱却と、みんなが同じをめざす画一的な工業型教育から個々を見守る農業型教育への転換だった。この2つの軸を基に、安心して楽しんで学ぶことができる場を創るという最上位目標を設定。それに向かう手段として、学びの「個別化」「協働化」「プロジェクト化」「リフレクション」という4つの融合に取り組み始めた。

「社会変化や学習指導要領を引用するまでもなく、どの先生も土台にあるのは『子どもたちに幸せになってもらいたい』という思いです。その幸せは、大人や教員が決めて子どもに押し付けるものではありません

ん。子どもたちが自分なりの幸せを見つけるため、その仕掛けや機会をたくさん提供するのが我々教員の役割だと思います。効率や損得はいったん後回しにして、ワクワク感を中心としたさまざまな経験を通して、リフレクションを丁寧に行うことで、生徒自らが感じたことや考えたことを主観的かつ俯瞰的に言語化して蓄積し、自信をも

図1 探究科のプログラム例

■色**プロジェクト(1学年「be Original」×アート)

自分の「好き」「大切」なものを108個書き出し、それを色で表現してみる。その色合いやプロセスから自分の特徴を考える。

■ウォレット・プロジェクト(2学年「be Creative」×デザイン)

使う誰かを設定して、その人のための財布をデザインする。インタビューからニーズを探り、プロトタイプを制作してフィードバックをもらう。

■わたしたちプロジェクト(3学年「be Confident」×アート)

これまでの気づきから自分の興味関心を広げ、自らテーマを設定し、何か行動を起こしてみることで、テーマを深める。



ウォレット・プロジェクトでは、実際に財布を作って考えていく。



School Data

1950年設立／
 普通科
 生徒数1348人(男子719人・女子629人)
 ※高校のみ
 進路状況(2024年3月卒業生)
 大学298人・専門学校8人・
 その他進学(海外)3人・その他13人

Outline

幼稚園から大学までもつ追手門学院が母体。教育理念は「独立自強・社会有為」。「特進SS」「I類」「II類」「II類スポーツ」に2022年より「創造」が加わり現在5コースを設置。個別型学習・協働型学習・プロジェクト型学習・リフレクションの4つの学びの融合、専任教員による探究科の実践が特徴。Webサイト「O-DRIVE」を開設し探究の実践を発信している。



創造コース
 教育推進部長
 牛込紘太先生

教頭
 辻本義広先生

「まずやってみる」を合言葉に、1学年は自分がオリジナルな存在であることを知る「Be Original」、2学年は他者の視点を入れた協働による新しい価値を創造する「Be Creative」、3学年は再び自分を見つめてそれぞれの道へと自信をもって進む「Be Confident」をテーマに取り組む。

一般的に高校の総合的な探究の時間は「数カ月かけて生徒が課題の設定から探究サイクルを回す」という内容が多い。だが、同校ではその前段階として、探究の「プロセス」に焦点を当てる。そこで大切

「先生全員が一斉に探究学習に取り組もうとしても、必要性に対する温度差や負担感から、なかなかうまくいかないでしょう。そこで、まずは探究科のみを担当する者を含む6人がチームとなって探究科に取り組むことで、4つの学びの融合の象徴的な実績を作り、学校全体を牽引していく」と考えました(辻本教頭)

「探究を構成する『探』と『究』のうち、何が自分のフックに掛かるのかを探し掘り起こす『探』の機会が不足しては、興味関心や課題を設定することが困難な生徒も出てくるでしょう。すなわち『究』をするこ

「探究を構成する『探』と『究』のうち、何が自分のフックに掛かるのかを探し掘り起こす『探』の機会が不足しては、興味関心や課題を設定することが困難な生徒も出てくるでしょう。すなわち『究』をするこ

「探究を構成する『探』と『究』のうち、何が自分のフックに掛かるのかを探し掘り起こす『探』の機会が不足しては、興味関心や課題を設定することが困難な生徒も出てくるでしょう。すなわち『究』をするこ

図2 創造コースの学びの仕組み



にしたいたいマインドを装着するための大小さまざまなワークショップを、アートやデザインの視点を取り入れていくつも実施している(図1)。探究の起点となる課題には、最初からSDGsのような枠組みで捉えるのではなく、例えば2学年では、身近な誰かのためにちよと長く変えることから徐々に広げていく。誰かのための財布をデザインするワークショップを通じ、他者のことを考える視点、インタビュからニーズを知る大切さ、まずやってみるなどのマインドを学ぶという具合だ。

「探究を構成する『探』と『究』のうち、何が自分のフックに掛かるのかを探し掘り起こす『探』の機会が不足しては、興味関心や課題を設定することが困難な生徒も出てくるでしょう。すなわち『究』をするこ

「探究を構成する『探』と『究』のうち、何が自分のフックに掛かるのかを探し掘り起こす『探』の機会が不足しては、興味関心や課題を設定することが困難な生徒も出てくるでしょう。すなわち『究』をするこ

「探究を構成する『探』と『究』のうち、何が自分のフックに掛かるのかを探し掘り起こす『探』の機会が不足しては、興味関心や課題を設定することが困難な生徒も出てくるでしょう。すなわち『究』をするこ

「探究を構成する『探』と『究』のうち、何が自分のフックに掛かるのかを探し掘り起こす『探』の機会が不足しては、興味関心や課題を設定することが困難な生徒も出てくるでしょう。すなわち『究』をするこ

「探究を構成する『探』と『究』のうち、何が自分のフックに掛かるのかを探し掘り起こす『探』の機会が不足しては、興味関心や課題を設定することが困難な生徒も出てくるでしょう。すなわち『究』をするこ

図3 創造コースの学びのテーマ

真
(1学年)

クリティカルな思考で自分の中の「当たり前」を手放す
 社会の正解や常識から離れ、自分は何を知っていて、何が本当に正しいのか、という本質的な問いに立ち返ることで、自分の中の「当たり前」を手放し、常にクリティカルな視点で思考できる状態を目指します。

善
(2学年)

他者や社会を知る中で自分の判断基準を見つめ直す
 社会の様々な事象に触れ、その背景を深く知ることで、社会の判断基準や善悪を理解します。その上で自己に立ち返り、自分はそのような基準や観点で動いているのか、自分自身の判断基準を見つめ直します。

美
(3学年)

唯一無二の「自分軸」を持ちゼロから創造する
 ここまで学んできたことを全て手放し、フラットな視点で自分の中に残っている判断基準を見つめ直します。それが唯一無二の「自分軸」であり、それをもって1年の集大成としてゼロから創造することに挑戦します。



創造コース2学年のLHR、「善」をテーマにした授業。



創造コースの歴史総合で、生徒それぞれが作った教科書について意見を交換。

年、「自分を創造する」をビジョンに掲げ、探究科のエッセンスをすべての教科に移植した「創造コース」を創設した。創造コース教育推進部長・牛込紘太先生はこう語る。「学校や保護者が目的地への最短距離を示して引張るのではなく、生徒が寄り道しながらでいいから自分で自分の道を歩むことを大切にしています。まずは自分を

知り、興味関心のあることを存分に学ぶ。学ぶことの楽しさをとり戻す過程のなか

で、生徒は自分を創造していけるのではないかと。そんな考え方に基づいて生徒を支援するのが創造コースです」

同コースの大きな特徴は、形式的な学びからの脱却をめざした、LHR、教科学習、プロジェクト実践を組み合わせた独自のカリキュラムにある(図2)。

学びのテーマには、1学年は当たり前を疑い手放す「真」、2学年は他者や社会を知り判断基準を見つめ直す「善」、3学年は自分軸をもつてゼロからの創造に挑戦する「美」を設定(図3)。LHRは、このテーマに沿った概念を学ぶ時間とし、これまで当たり前だと思っていた価値観に揺さぶりをかけ、手放すことで、自分の世界を広げていくベースをつくる。

教科学習は、最初に知識を与えてそれを使ってみるという一般的なアプローチとは逆で、まずやってみて、そうなる理由を考察し、調べて深めるという順番だ。例えば、「真」をテーマとする1学年のある日の「歴史総合」では、教育基本法を読んだうえで、「今後を生きていくために必要な能力を身につけさせる教科書づくり」に取り組み、意見交換を実施した。学びの連続性を意識し、時間割は2コマ連続を基本としている。

このように概念と教科を並行して学ぶことで、教科の学びは概念の理解を深めるきっかけとし、概念の学びは教科の学びを横断的につなげることを狙っている。

そして、年5回、LHRと教科で学んで

きたことを言葉、アート、音、ゲームなどさまざまな方法で表現する「プロジェクト実践」に取り組む。例えば、善悪の判断について学んだあとのプロジェクト実践では、

ネガティブに感じることをポジティブに捉え直すことを楽しく体験するゲームを生徒が考案し、ワークショップを実施した。また、自分自身の判断基準を見つめ直して演劇として表現するプロジェクト実践では、演技はもちろん、台本や衣装作り、音響や照明まで生徒の手によって舞台を作り上げた。3学年では、一人ひとりが自分はどうありたいかや興味関心を突き詰め、卒業プロジェクトとしてアートとデザインで1つずつ作品を制作する。

同コースではペーパーによる定期考査は実施せず、各教科の評価はルーブリックによる観点別評価を行う。プロジェクト実践は評価を行わず、生徒が評価を気にせず取り組めるようにしているという。

誘導せず、観察しながら待ち 生徒の自走を促す

探究科や創造コースのプロジェクト実践などでは、いかに生徒が主体的に取り組むかがカギとなる。それを促すアプローチは個々の教員によって異なるが、「生徒を誘導しない」「教員も面白い」というスタンスはすべての担当教員に共通している。

「突拍子もないお題をもってくる生徒もいますが、第一印象で良い・悪いのジャッジをしないようにしています。ごく簡単な言葉を使っても、非常に深い思考や経験のうえで行きついた言葉である可能性も

あります。その背景にあるものを大切にしています」(牛込先生)

また、牛込先生は、生徒をよく観察し、それぞれのタイミングを急かさず待つことを心掛けているという。

「エンジンがかかるタイミングは生徒によってさまざま。例えば、じっとしている場合も、何をしたいかわからないのか、やることは見えているが動けないのか、意図があつて動かないのかなど、状況は異なります。それを単に見守るのではなく、探究科やプロジェクトで生徒が感じたことや考えたことを記入するリフレクションも含めてよく観察し、適切なタイミングで言葉かけます。生徒の状態によっては別の教員から話してもらうなど、教員チームで連携して当たっています」(牛込先生)

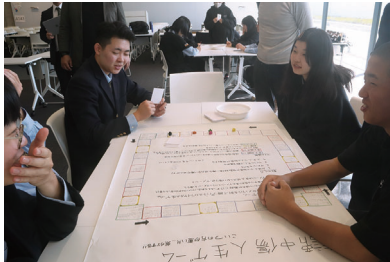
3年生に対して教員がやっていることはメンタリングに近いという。「『これはどういう意味?』『これを大切にするためにどんな条件が必要だろうか?』など、答えではなく問いを投げ、思考を深める支援や行動の後押しをしています。学年が上がるにつれて教員の支援は緩め、3年生ではほとんど生徒の自走に任せています」(牛込先生)

まずやってみるから 自分軸を大切にしたい将来へ

創造コース1期生は今年度3年生になつた。自分の考えをもって協働する学びの多さに、入学当初から魅力を感じていた生徒は多いが、苦手意識のある生徒もいた。しかし、今はそれぞれの個性を活かした関わり



1年生のプロジェクト実践では、自分をアートで表現。



善悪をテーマにしたゲームを考案。体験するワークショップを開催。

自分と他者を行き来するさまざまな経験を通じて、将来に対する考え方が変化する生徒も少なくない。入学時は両親と同じ進路を歩むことに疑問をもっていな

「あらゆる授業・活動において、まずやってみる。それで違うと思ったら、手放すこともできる。『自分には関係ない』と捨てず何にでも全力で取り組むという、創造コースがめざす姿を一期生は体現してきてくれました」(牛込先生)

方を見つけ、楽しむ姿が目立つ。自分の興味関心を大切にすなかで、ときには意見がぶつかることもあるが、「気を遣って丸く収めたり、喧嘩になったりではなく、それぞれの意見をきちんと主張して互いに理解しようとする建設的なコミュニケーションができるようになってきた」(牛込先生)という。

今、授業の枠組みにこだわらず校内外を舞台にし、さまざまなチャレンジが生ま

れている。グループワークが苦手だと言っ

た生徒が、プロジェクト実践で取り組ん

だことを仲間と独自に深め、一部では商

品化をめざして活動する姿も見られる。

「あらゆる授業・活動において、まずやっ

てる。それで違うと思ったら、手放すこ

もできる。『自分には関係ない』と捨てず

何にでも全力で取り組むという、創造コ

ースがめざす姿を一期生は体現してきて

くれました」(牛込先生)

自分と他者を行き来するさまざまな経

験を通じて、将来に対する考え方が変化

する生徒も少なくない。入学時は両親と

同じ進路を歩むことに疑問をもっていな

った生徒は、学校生活のなかで教育の可能性を見だし、教員という新たな目標を見つけて進んでいる。また、海外に対する興味を内面に押し込めていた別の生徒は、環境の後押しで海外研修に踏み出したことから行動が加速し、海外留学という明確な目標に向き合うようになった。こうして生徒が自分で考えて選択した進路を、同校は全面的に応援する方針だ。

「自分は何が好きなのか、自分はどんなことを大切にしているのか。抽象的なままにせず、深めて言語化して自己理解の解像度を上げてきたなかで、自分の進みたい将来が見えてきている生徒も多いと感じています。その背中をそっと押すことで、生徒一人ひとりが自分で自分の道を切り拓いていく一歩を踏み出してほしいと思っています」(牛込先生)

多様な生徒の選択肢の一つとして「面白い学校」をめざす

従来の教育への違和感を原点とした、学びの「個別化」「協働化」「プロジェクト化」「リフレクション」を融合させていく10年がかりの構想は、コロナ禍という逆風による停滞期も乗り越え、着実に進んでいる。今後のさらなる進展に向けて、辻本教頭はこう意気込みを語る。

「本校が大切にしている4つの学びのうち、最も難易度が高いのが『個別化』です。これも最近では広く注目されるようになり、公立小学校でも自由進度学習などが行われるようになってきました。そうした学びを経験した生徒たちが高校に上がった

Interview

挑戦のハードルが下がり、「今やろう」

先生の話聞くだけでなく授業に興味をもって、創造コースに入学しました。テストのための勉強は嫌ですが、自分のためになると実感できる学びは楽しいです。グループで協力しながら取り組む授業は、みんなから刺激をもらいながら嫌いな数学でも進めることができ、自分のための学びだと感じます。今がんばっているのは、小説を書くことです。頭の中にある世界観を表現したくて、小説という手段を使っています。本当は大人になってからやろうと思っていたのですが、プロジェクトでたくさんの大人と出会い話を聞くなかで、挑戦することへのハードルが下がり、「今やろう」と始めました。今は小説の執筆が学べる大学への進学をめざしています。(創造コース3年生・進 拓斗さん／写真左)



自ら行動を起こし、可能性を広げた

中学生のときから海外に憧れがあり、高2直前の春休み、外部が企画するバリ島での研修プログラムに個人で参加しました。勇気があることでしたが、「行かずに後悔したくない」と思い切りました。プログラムは、環境問題を自分たちで見つけて、その解決策をグループで考えるというものです。そのなかで人間関係が広がり、次の夏に新たな海外研修に挑戦するきっかけを掴むこともでき、活動の幅が広がりました。進学先は海外の大学を考えています。なるべく若いうちに日本を抜け出し、ちょっと負荷がある状況で自分を強くすることができたらいいなと思っています。(創造コース3年生・水戸口 真優さん／写真中央)

楽観的に捉えて行動するように

親の勧めで創造コースに入学し、最初はグループワークが苦手意識がありました。でも、回数を重ねるうちに、自分はプレゼン資料を作ることが得意だと気づき、そこからグループワークが楽しくなってきました。昨年、高知への探究旅行で、高知の良さを現地で伝えるワークショップに取り組んだとき、私たちのグループは「高知を知るすごろく」を作りました。現地の方にも好評で、「すごろくという形式は、ほかの物事や自分を知るときにも手軽に楽しく使えるのではないかと考え、みんなで『これを商品化しよう!』という話になったんです。その後、再度高知を訪れて小学校ですごろくを使った授業をするなど、改良を重ねています。これまでは「うまいかない」と思ってやらなかったことも、今はやろうと思える。楽観的に捉えられるようになりました。(創造コース3年生・山崎 凜さん／写真右)

きたとき、4つの学びの融合をもう一段グレードアップできるのではないかと期待しています」(辻本教頭)。

同校がめざすのは、「良い学校」というより「面白い学校」だ。辻本教頭は「こういう風変わりな学校が大阪に一つぐらいあってもいいだろう」と言う。

「本校にはさまざまなコースがありますが、すべてを創造コースのようにする考えはありません。多様な個性をもつ子どもたちがいるのだから、いろいろな学び舎があってもいい。今後、子どもたちが自分に合う学び舎を選べるよう、いろんな面白い学校が増えていくのではないだろうか」(辻本教頭)